横浜薬科大学の環境に関する取り組みについて
～ 協働農地において薬用植物園を展開 ～

現在、横浜薬科大学は横浜みどりアップ計画の一つ、農園付公園整備事業に参加して、薬用植物園を展開しています。そして、薬食同源・漢方薬膳などで培ってきた薬科大学のノウハウを活かし、本学教職員・学生と地域住民が力を合わせて、緑の多い、環境にやさしい街づくりに取り組んでいます。

本事業は平成28年４月から、本学に隣接する深谷町ふれあい公園（約4300㎡の農園付公園、愛称「ハマヤク農園」）内の協働農園エリア（150㎡）において、市民参加型のハーブ園を企画し、地域住民とともに土作り・植付け等の栽培体験、収穫から薬用植物・ハーブの楽しみ方講座などを実施しているもので、一年を通じて様々な薬用植物等を育てながら、自らの健康とともに地球の健康にも思いを馳せています。

活動においては、本学漢方薬学科の教授等を中心に職員及び学生と募集応募により参加する11名の地域住民ボランティアの皆さんが、週2回を基準に植物の世話の合間、ミニ講義（おしゃべり）を挟みながら楽しく過ごしています。

協働農園

栽培の様子

畝作り

苗植え

摘　花

収　穫

今年もジャスミン、マロウ、レモングラスやローズヒップをはじめとする約15品種の薬用植物・ハーブが育ちました！

収穫したものは主に教育・研究資源として活用したり、受験生を対象としたオープンキャンパスにおいては、受験生にハーブティーを試飲していただいたりしております。また、本年度初試みの受験生を対象としたキャンパス・ラリー（右写真）においては、漢方薬学科の展示ブースにおいてハーブ等の各種薬草（乾燥させたもの）を展示し、受験生に薬草について理解を深めてもらっています。

キャンパス・ラリーの様子

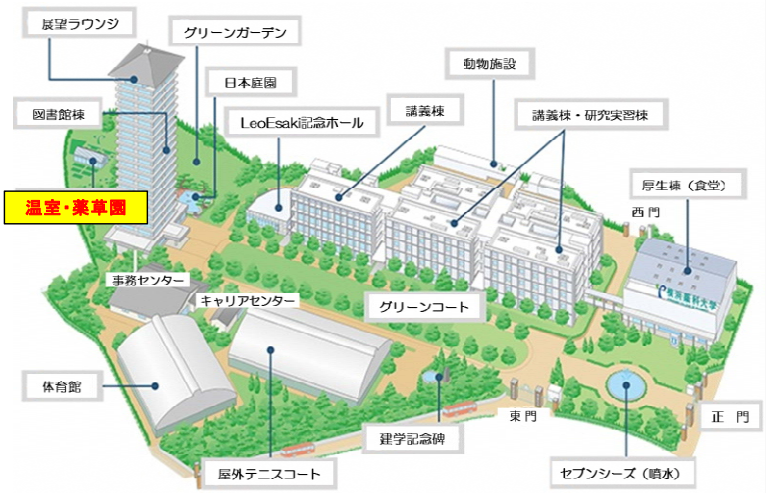
様々な緑が溢れる学内の環境

広大なキャンパスにはケヤキやポプラ、フェニックスなど多くの樹木が生い茂る一方、約2000㎡の薬草園エリアでは漢方薬、民間薬、西洋ハーブとして用いる薬用植物300種以上が四季折々に特徴的な花を咲かせています。

薬草園内の温室ではアロエ、ウコンなどの熱帯、亜熱帯性薬用植物の他にパパイヤ、パイナップル、パッションフルーツなどの果樹が、また水槽ではハス、ショウブなどの水生植物がそれぞれ育ち、これらの花や水を求めて蝶などの昆虫や野鳥も多く訪れ、リスたちが木々の間を駆け回る自然豊かな環境が広がっています。

このように、横浜薬科大学は緑豊かな教育施設の維持に加えて、協働農園（ハマヤク農園）の運営を通じ、これからも地球温暖化対策に貢献したいと考えています。

緑豊かな横浜薬科大学の構内



横浜薬科大学
YOKOHAMA UNIVERSITY OF PHARMACY